

デュルケームの集團意識に就いて

福 井 元 澄

(一)

デュルケームの集團意識^aに關する論議は、先づ彼が個人意識に就いて如何なる概念を有するかと云ふ點にその出發點が求められねばならない。蓋し、彼の社會心理は、個人心理のそれを前提とし鍵として展開されてゐるのであつて、彼の個人意識に關する概念を看却しては、その社會心理學を完全に理解し把握する事は困難であると考へらるゝからである。

然らば、デュルケームは、個人心理を如何に解し如何に説明してゐるのであらうか。今一言にして云ふならば、彼は先づ、個人の心意状態の根本要素たる感覺の地盤を腦細胞に求め、感覺は實にこの腦細胞相互作用によつて生まるゝとなし、而して感覺は結合作用して心像を生み、心像は更にその相互作用及び結合によつて概念

を生む。而してこの過程は、このまゝの状態には終らない。即ち更に、概念はその相互作用及び結合によつて表象^bを生む。かくして表象は、表象として永續し、細胞より全然獨立せる固有の作用と實在性とを有する、と云ふのである。我々は次に、彼の言葉を引用しつゝ、今少しく詳細に彼の思想を敷衍してみやう。

凡そ、我々の意識なるものは、一體如何にして生まるるかと云ふに、それは腦髓過程を機縁として生まるゝのである。が然し、ハツクスレーやモーズリーの如く、意識を生理生活の從屬現象たるに過ぎずとする考へは誤りである。「彼等は云ふ。意識は、その根柢をなす腦髓過程の單なる反映であり、その過程に隨伴するが、然しそれを構成する事なき微光であると。然しながら、一つの微光は空虚なるものではない。それは一つの現實であつ

て、その特殊な結果によつて存在してゐるのである。⁶元來生物は、意識を有する程、その活動は單なる反射運動より遠ざかるのであつて、「意識を具備せる能作因は一反射體系に限られた活動力を有する生物の如く行動するものではなく、躊躇し、模索し、熟慮するのであつて、意識が識別せらるゝのは、實にこの特殊性によつてである。」⁴これ即ち意識が、無に非ざる事を示すものに外ならない。

彼は更にかゝる點より、ジエームスの記憶及び類似聯合の神經學的説明を排斥し、「若し時の流れの各瞬間に於いて、心的生活が、明瞭なる意識に現在與へられてゐる状態によりてのみ構成されてゐるとするならば、それはこの心的生活が、無に還元されてゐると云ふに等しい。」⁵元來意識を占領してゐる若干の状態は、「神經系統の固有性及び性向によつてではなく、その状態の内的特性より派生する親和力によつて、互に相呼び結合し得る必要がある。然るに、若し記憶が有機的なものであるとす

るならば、これ等の聯合自身も亦、等しく、有機的な連結の單なる反射以外のものではあり得ない。何となれば、若し決定された一つつ表象が、先行生理状態の介入によつて始めて喚起さるゝに過ぎないとすれば、この先行状態自身が生理的原因による外再生され得ないので、觀念も腦物質の對應部分自身が物質的に結合されざる限り結合し得ないからである。」⁶即ち「記憶は、排他的に神經物質の一特性であつてみれば、觀念は相互に他を喚起し得ない。」⁷要するに「精神とは、過去及び現在の表象によつて構成されてゐる」⁸一つの全體であつて、換言すれば、「心的生活は表象の絶えざる流れである。」⁹かくて個人意識は、形而上學的實體でも又腦髓の從屬現象でもない。それは、無數の記憶表象無意識表象知覺表象との結合よりなる統一體なのである。この意味に於いて、個人意識は、大脳細胞より分離獨立して、それ自體の存在を持つてゐると云ひ得るのである。

かくの如き表象は、又それ自身様々に結合して新しき複雑なる表象を作り、その結合の度の進む程、それは、益々生理現象より獨立して來る。従つて反對に最も單純

なるもの即ち感覺表象の如きは、生理現象と密接なる關係を有する事は云ふまでもない。「感覺は、幾多の分子的變化の複合である以上、腦髓に依據してゐる。」⁽¹⁰⁾然しながら、「一度感覺が成立するや、それは大脳形態學も生理學も説明し得ざる法則に従つて結合する。かくて、心像が發生し、心像は又相集りて概念となる。而して、新狀態が順次舊狀態に添加さるゝに従つて、新狀態と心的生活が立脚してゐる根底との間には、中間介在が次第に増加してゆく爲に、これ等新狀態は、それ程直接に、この根底には依據しなくなる」⁽¹¹⁾のである。

要するに、心理現象は、生理的機能の副現象ではない。記憶の條件を分析しても腦髓の絶えざる活動を説明する事は出来ない。結局多數の腦髓細胞が地盤となつて、その結合の上に、全く性質の異なる表象と云ふ精神的なものが生ずる。而して表象は、表象として永續し全然細胞より獨立せる外的存在であり、固有の作用と實在性とを有するのである。然らば、我々個人意識の單位となるものは、すべてかゝる表象及びその結合より

なる複雑なる表象のみなりやと云ふに、そうではない。「我々の中には二つの意識がある。一つは、我々が我々の全集團と共同に有するところのものであり、従つて、我々の中に、社會が生き活動してゐるのである。これに反し、他は我々の個人的人格のみを代表するものである。」⁽¹²⁾この前者を、デュルケームは、集團表象又は集團意識と云つてゐる。然らば、個人意識と集團意識との間には如何なる關係が存するのであらうか。

我々はこれを次にみなければならぬ。而して彼の個人意識の概念に關しては、こゝでは只、彼が個人心理の構造を説明するに、觀念を細胞に結びつける行爲の一切の企ての空虚なる事をかく主張し、マインド・スタッフセオリーを力説したかと云ふ事は、その社會心理を説明せんが爲の前提であると云ふ事、並びに以上を通じて現はされたるデュルケームの指導概念、典型觀念は、化學的綜合の觀念であると云ふ事に留意するのみに留めておかう。

(1) デュルケームによれば、社會學が嚴密なる科學として成立する爲には、それに獨自なる對象がなければならぬ。而してその對象たる社會現象は、第一個人より生起せず而も個人に外在する事。第二に個人を外部より拘束し強制する力を有する事、この二特徴を具有する事によりて他の現象と區別さるゝとなし、これを社會事實と呼んだ。然るに、彼によれば、社會事實は社會意識又は集團意識に外ならぬ。我々は彼の著述の至るところに於いて、これ等二つの言葉を見出すのである兩者は結局同一現象を指すのであつて、ゲルケは、前者は主として準物的な方面を、後者は純心的な方面を指すものとしてゐる。Gehlke: *E. Durkheim's contributions to sociological theory*, p. 58.)

(2) こゝに注意すべきは、彼の云ふ表象は「それ自身の生活を送つてゐる一部自動的な實在」であつて、我々は、彼の使用してゐる表象と云ふ言葉を、普通使用されてゐるよりも廣義に解すべきであつて、その中には感情要素も意志的要素も含まれてゐるのであり、ゲルケの如く彼をインテレクチュアリズムなりと批難する(ゲルケ、一六)のは穩當ではな。

- (3) Durkheim, *Sociologie et philosophie*, p. 3
- (4) *Ibid.*, p. 4.
- (5) *Ibid.*, p. 8.
- (6) *Ibid.*, pp. 9—10.

デュルケームの集團意識に就いて

- (7) *Ibid.*, p. 14.
- (8) *Ibid.*, p. 24.
- (9) *Ibid.*, p. 16.
- (10) *Ibid.*, p. 37.
- (11) *Ibid.*, p. 44.
- (12) Durkheim: *De la division du travail social*, p. 99.

(二)

デュルケームの集團意識論は、上述の個人心理の説明を前提として出發する。即ち腦髓過程と表象の關係と、個人意識と社會意識の關係とのアナロジーより出發するのである。今デュルケームによれば、表象が、腦髓細胞の結合及び相互作用の創造的な綜合を地盤として生ずるが如く、集團表象も亦、結合せる個人の總體を基體として持つ。然るに個人表象は、神經要素間に交へらるゝ相互作用の所産なるも、而もこれ等の要素間に從屬的なものではないと云ふ事に不思議がなければ、集團表象は、社會を構成する要素の意識間に交へらるゝ相互作用の所産ではあるが、後者より直接發生せず従つて後者より以上のものと云ふ事にも何等不思議はない。

而して「集團表象が個人意識以外のものであると云ひ得るものは、これ等の表象が個別的に考へた個人より派生するものではなく、これ等個人の協同を待つて初めて派生するからである。勿論共通な結果を仕上げる時、各人はその割當を齎らすであらうが、諸個人の感情は、結合によりて展開される獨自な力の作用の下に結合して始めて社會的となり得るのである。その結果として起る相互融合及び變化の爲に、これ等の感情は異つたものとなるのである。一つの化學的綜合は各要素を集中し統一し、その事自身によりこれ等要素に變化を與へるのである。この綜合は全の所産である以上、この綜合が舞台として用ふるはその全である。この綜合から遊離して來る結果は、丁度全が部分を喰み出すと同じく各個人精神を喰み出してゐる。この結果は全體によりて存在すると同じく全の中に存在する。この結果が諸部分の外にあると云ふのは、かくの如き意味に於いてある。勿論個々のものは何かを含んでゐるであらうが、然し全體はどの個にも存在しない。」⁶かくて表象が、腦細胞を基

體としつゝ、而もそれを離れた一つの新しき獨自なる實在であるが如く、集團表象も亦、その基體としての個人なくしては成立し得ないが、然し個人意識の結合の結果としてそれが現はれた時、それは既に新しき實在である。即ち集團表象は、孤立せる個人よりではなく、彼等の融合より生ずるものであり、個人的なる諸特質は、結合と云ふ事によりて展開せらるゝ、獨自なる力の下に變形して、全然別種の社會的なるものとなるのである。

さてかくの如く、集團意識は、個人意識の綜合より生じた、而して個人意識とは異なる一つの新しき獨自なる存在であるとは云へ、然しながら個人意識以外の何處にも存在するものではない。それは正しく個人意識の中に存在するのである。「社會生活の中には個人心の中にない何ものもない。」⁷かくて我々の中には、全體に共通なるものと、我々のみを代表するものとの二つの意識が存在するのである。

以上の如くデュルケームの根本思想は、「要素の中にその複合體の全説明が藏せられてゐる。」とみるタルド

と全然その立場を異にし、すべて團結せる諸部より成立する全體はその諸部分の總計より大なる又これと異なる或ものであり、その諸部分に對して新しき性質を有する。所産は所産によりて説明せらるべきであると言ふ原則に立つのであるが、然し固よりデュルケームと云へども社會事實の萌芽は個人の中に求めらるべきものであると云ふ事を否定するものではない。社會の基礎としては個人以外の何ものも存し得ないと云ふ事は明にこれを認めてはゐるのであるが、然しながらその個人が社會を形成して居ればこそ、そこに新現象が生起するのであり、かくして生起せる新現象は、最早個人意識外のものであり、個人意識に作用してその大部分を形成してゆく。故に社會は個人なしには成立し得ないけれども、然しその個人は、社會の形成者であるよりはむしろより大なる程度に於いて、社會の所産なりと見たのである。次に我々は、個人意識と集團意識とを對比し、後者の特質を明にしやう。⁴

第一、集團意識は個人意識に對して外在的である。

デュルケームの集團意識に就いて

「義務、宗教的信仰及び行事、或は思想を發表する爲に我々が用ふる記號制度、負債を支拂ふ爲に用ふる貨幣制度、商賣關係に於いて我々が利用する信用機關、我々の職業に伴ふ諸慣例、これ等は我々自身の習慣とは獨立に働くものである。かく諸個人の意識の外部に存在し、右の如き屬性を現はす行爲、思惟、感得の様式がある。」⁵ 尙又「社會的潮流と云はる、一つの會合内に於いて醸成さるゝ熱誠、怒、憐憫等の激情は、何れの個人意識より來つたものではない。これ等は、外部より我々個人に來り我々の意志如何にかゝはらず、我々に持ち來たされるものである。」⁶ かくして集團意識は個人意識に對して外部より來ると云ふ特性を持つ。

第二、集團意識は個人意識とその種類に於いて異なる。「集團は孤獨の場合、その諸成員と全く異なる方法によりて、思惟し感得し行動するものである。」⁷ 「社會は獨自の現實態であつて、その意識は個人のそれとは全然異つた内容を持つ。」⁸ 而して、この集團意識の種類相異を明かに例示するものは群集心理であつて、こは、群集

の思想、感情、行爲とその成員の孤獨の場合に於ける思想、感情、行爲との對照によりて理解される。而してかゝる兩者の相異は、その地盤の差によるものと見るべきである。「事實集團表象が現はすところのものは、集團が自己に影響を與ふる對照との關係に於いて考ふる様式である。然るに集團は、個人とは異なる仕方で形成され、又集團に影響を與ふる事物は、一つの異なる性質を有するものである。同一の主體をも同一の客體をも表明せざる二表象が、同一原因に依據する事は出來ない。社會が自己及び自己を圍繞する世界を表象する仕方を理解するには、個體のそれではなく、社會の性質を考察しなければならない。」⁶³

第三、集團意識は、個人意識と異なるのみならず、又相互の間に於いても差異を有する。各社會は夫々自らの觀念を有し自らの特性を示す。而してこは地盤の相異によるのである。たとへば「今日我々が持つ如きコスモポリタニズムは、ローマ都市の状態に於いては、起り得なかつたところである。」⁶⁴ 又「原始宗教現象の單純性

は、その生起せる原始社會の單純性と密接に關係し、その信仰は、社會の構造の變化と共に變化してゐる。」⁶⁵

第四、集團現象は、個人表象に對して優勝性を持つ。

第一「社會は、個人に對し、時間及び空間に於いて勝れてゐる。」⁶⁶ 個人は群集の中に於いては無力であり、その無力は、群集成員の數と共に増加する。即ち「集團感情の到達する強度は、これを共同に經驗する意識の數に依據する。」⁶⁷ 次に集團表象は又、その體統的地位によつて即ち表象形成過程の最後の產物であると云ふ意味に於いて、個人表象に對して優勝性を示す。「集團意識は、意識の意識なるを以つて、心理生活の最高形式である。」⁶⁸ 又「個人意識を超えたところ、そこに社會は存する。」⁶⁹ 又「社會は個人の力に對して無限に優越してゐる。何となれば、それは個人力の綜合なるが故に。」⁷⁰

以上これを要するに、デュルケームは、個人表象と集團表象とに、その基體に對する關係に於いて同一性を認め、何れも一つの新しき獨自の存在なりと考へたのである。而して集團表象は、個人表象に對し、後者に内在

はするが而もその外部にありて性質を異にし、後者よりも勝れたる精神的勢力を有する。而して、かゝる優勝性を有するが故に、前者は、後者を拘束し強制するとみるのである。

次に我々は、彼の理論を検討してみやう。而して、この小論に於いては、特に社會學に於いて主要と思はる集團意識の成立及び本質に關する問題に就き我々の考察を進め度いと思ふ。

- (1) *Sociologie et philosophie*, p. 34.
- (2) *ibid*, p. 36.
- (3) *ibid*, p. 36.
- (4) 井ノ口トシキタ (E. Durkheim's contribution to sociological theory, pp. 32-40) 124。
- (5) Durkheim; *Les règles de la méthode sociologique*, p. 6.
- (6) *ibid*, p. 9.
- (7) *ibid*, p. 128.
- (8) *Elementary forms*, p. 16.
- (9) *Règles*, pp. XVI-ii.
- (10) *De la division du travail social*, p. XXXViii.
- (11) *Elementary forms*, p. 5.

デュルケームの集團意識に就て

- (12) *Règles*, p. 126.
- (13) Durkheim; *Le suicide*, p. 214.
- (14) *Elementary forms*, p. 17.
- (15) *ibid*, p. 447.
- (16) *Règles*, p. 15.

(二)

先づ我々は、第一集團意識の成立に就き、集團意識は全くそれ自身によりて成立し、それ自ら發達すると解するデュルケーム社會學の根本的特徴に就いて吟味してみなければならぬ。

既に述べた如くデュルケームは、脳細胞の相互作用及び結合によりての個人意識の産出よりアナロジーして、直ちに個人意識の相互作用及び結合によりての集團意識の産出を説くのであるが、かくの如く個人意識と物的細胞とを比較し、同時に個人意識と集團意識とを比較すると云ふ事は果して當を得た事であらうか。如何にも説明として有用なるアナロジーは、或る點までは正確であらう。然しながら、比較せらるべき要素の間に或る

著しき同一性がなければならぬ。然るに今全體の構成要素であると云ふ事實を離れて、何處に細胞に對する個人意識の同一性があるのであらうか。尙又彼のマインド・スタッフセオリーの論理に従へば、集團意識は、個人意識の根本的な要素過程に、論理的に還元せられねばならない。然るに個人心理と社會心理とを嚴重に區別しながら、心理がその根本形式に於いてマターから派生さるゝと云ふ事は、大なる矛盾と云はねばならない。

更に吟味を進むるに、かく集團意識の成立に就きては彼はたゞ「集團意識は、個人意識より直接生まるゝものではなく、個人意識の結合及び相互作用によりて産出するものである。」と云ふ事を繰り返す程度のみ止まるのであるが、然しながら個人意識A・B・C・Dは、如何にして集團意識A B C Dを生み出したのであらうか。更にA・B・C・DをしてA B C Dたらしめたものは何か。前述の如く彼は腦細胞の結合及び相互作用によりて、個人意識が成立すると云ふ事よりして、直ちに、個人意識の結合及び相互作用によりての集團意識の成立を斷定し、

その結合又は相互作用の一定の仕方そのものに關しては、何等言及するところがない。即ち「如何に遠く遡つても又如何なる場所に於いても、社會は、個人に先だちそのすべての傳統を個人の上に強制する。」^a社會學者は、たゞ與へられたる事實として社會を認め、それを出発點とすればいゝのであつて、それが如何にして生起せしやを問題にする必要はないと考へたのである。^b然しながら、かく「集團意識の形成の問題を社會學に於ける考察より除外する事は正當であらうか。」^c實は彼がかくの如く殆んど無視した部分に極めて重要な社會學の問題が存する。即ち所謂相互作用及び結合の仕方そのものゝ究明が、重要な一問題として取扱はれねばならぬのであつて、單に相互作用及び結合すると云ふが如き漠然たる敘述を以つて、決して満足せらるべきではない。要するにデュルケームは「個人の周圍の社會の形態叢が個人に及ぼす強制を實感する、が然し如何にしてこれ等の形態が生起せしやを説明する仕事の前には全然無力」^dであつて、こゝは結局彼の興味が意識の内容

の上であり、その機能的側にはないと云ふ事による。勿論、流動的な把握し難き内的方面の現象を、客観的な外的方面より把握せんとするかゝる態度は、單に研究の一手法たる限りに於いて、我々はこれを認める。然しながら社會學は單にかゝる態度のみに止まる事は出来ない。個人意識と個人意識との相互作用の方面よりの開明をも必要とするのであつて、この意識に於いて、ジニエルの社會構成體成立過程に關する學説は、デュルケームのこの難點を補ふものとして最も重要な役割を演ずるものと考へられねばならない。

以上に於いて、我々は集團意識の成立に就いてデュルケームの見解を吟味し、集團意識が如何にして産出せらるゝかその形成過程の究明の必要なる事を指摘した。然らば次に、形成産出せられたる集團意識は、如何なる意味に於いて獨立實在性が認めらるゝのであらうか。

上述せる如く、デュルケームは、集團意識を以つて個人意識の相互作用及び結合より生じたる一つの新しき

實在なりとするのであるが、こゝに注意すべきは、彼は集團意識を以つて個人意識とは區別さるゝ一つの實在とみるが、而もこれを以つて本來個人意識とは獨立なる存在を有する一つの實體なりとみる形而上學の見解とは異なりと云ふ事である。即ちデュルケームは、決して社會の中に本來個人を超越せる或る實體的精神が存在すると考へたのではない。そは、恰も個人の心的生活に或る自律性を認め精神性と云ふ精神的にして本質的なる或るものをその根本に於いて認めてゐるのであるが、然しそれが爲に、自體から全然離れて不可解なる世界に空想的なる孤獨の生活を營んでゐる靈魂を考ふる必要はないとなしたのと同じである。而して靈魂は我々の世界にあるのであり、我々のすべての思想は腦細胞の中にあるとさへ云ひ得るのであるが、然しながらそは、腦細胞の如何なる部分にありと云ふやうな性質のものに非ずして、それ等細胞の作用の結合の結果として生じたる特殊なるものとして、それ獨自の存在様式を有すると同様、社會は、全く個人を離れた實體と云ふやうなもので

はなく、個人意識が結合と云ふ事によりて體系づけられた獨自なる現象の全體に外ならぬと考へたのである。

然るに、かゝるデュルケームの如き見方に對して反對する立場がある。即ち如何なる意味に於いても、社會意識又は集團意識なるものは、個人意識に對して獨立なる實在性を有するものに非ず。總じて集團意識現象なるものは、個人意識が特異なる事情又は境遇の下に置かれた爲に、即ち特異なる刺激によりて特異なる反應をなしたに過ぎない。何等他の場合に於ける心理活動と根本的に異なるところはない。心理活動としては、たゞ個人心理的活動が存するのみであり、従つて、個人意識と區別せられた集團意識なるものが實在するのではなく、そはたゞ個人意識の特定の狀態に過ぎぬと云ふのである。⁶如何にも社會の一切の現象は、すべて個人活動の錯綜せるものとして、個人意識の現象に分析しつくされ、而して個人意識以外に社會意識とか集團意識とか言はるゝものは別に存在する事はないであらう。然しながら、そはただ究極の分析に就いて云つたものに外ならないのであ

つて、他面その錯綜して現はれ來つた綜合を考究せんとするデュルケームの立場も亦、認められねばならないであらう。

然らば、デュルケームは、集團意識の獨立存在性を如何に證明せんとしたのであらうか。今その論據を吟味するに、二つのものが考へられる。第一は、その根據を、集團意識は個人意識を現實に支配してゐると云ふ事即ちその有效性或は效驗性に置いてゐる。第二は、集團意識は、個人意識の結合及び相互作用によりて成立するが、而も化學的元素の結合より産み出さるゝ化合物がこれ等の元素と異なる新實在であると同様の意味で、個人意識とは異なる新しき實在であるとするのである。

今第一の點に就いて考ふるに、こはヴントも亦主張してゐるのであつて、即ちヴントは、精神生活の實在性を論じて、その論據を事實的效驗性に置いた。即ち集團意識の實在性も集團意識が個人意識に對して現實に拘束力を有し支配力を有すると云ふ事、換言すれば事實的效驗性を有すると云ふ事によりて、又これを證明し得るの

である。然るに單に效力を現はし効驗を示すと云ふ事を以つて實在性を證明し得ないと反對するものがある。然しながら、必ずしも實在なる概念を主體概念に限定する必要はなく、例へば拘束力に於いてこれをみるが如き、事實に於いて明かに效力を現はし効驗を示すところのものを機能としての實在とみる立場も亦認められねばならないであらう。

さてかくの如く集團意識の實在性はかゝる意味のもの、即ちその有効性或は効驗性を意味するに止まるものならば、恐らく、こゝに問題はなからう。然しながらかかる意味のものとみるだけにとゞまらず、第二の場合の如く効驗性以上のものを實在性に認めて來る場合は、ここに異論が生じて來る。即ち若し第二の場合に於ける論法より推すならば、集團意識と集團意識との相互作用及び結合より産出せらるゝ複合的集團意識も亦單なる集團意識より異なる新しき實在でなければならぬ事になる。然るにデュルケームによれば、兩者はたゞ複合の度合に於いて相異なるのみで、何等性質上に於ける差異を有せ

ず共に同じ實在なりと認めてゐる。然しながらデュルケームのこの第二の見解が立つ爲には、兩者の間に複合の程度以上の性質上の相違が認められなければならぬ。この點に留意して彼の所論をみるに、性質上の相異とは、結局單純集團意識が生物現象及び物理現象に依據する程度は個人意識がそれに依據する程度よりも小である而して集團意識が益々複合的に高等になる程生物及び物理現象より獨立する程度が増大し、遂には全然獨立するもの、如く論じてゐる。然しながらかかる現象に依據する程度の大小の如きものは、結局外部的條件の差異にすぎず、兩者の性質を根本的に區別するものではない。

註

(1) Regles, pp. 128 - 129.

(2) のみならずデュルケームは又個人は社會の創始的素因たり得ないと考へてゐる。今かかる Social Causation の問題に就いては、こゝに詳述する違はないが、要するに絕對始源の意味に於いての社會の形成に關しては、我々は社會と個人とに就いてその先後を定むる事は出来ない。然しながら一方社會現象所産に於ける創造力としての個人を考ふる事は不可能ではなく、ケルケも云ふ如く(一〇一頁)こは

個人の成長過程を考察する事によつて理解される。即ち個人成長の初期に於いては、彼は常に受動的であつて種々の環境を媒介として一定の社會的構成物を傳へられる。然しながら一度かくして個々の個人的鑄型の中に社會の姿が反映すると、個人は大なり小なりの創意を以つてその上に働きかける。而してそれが新しい社會現象を生起せしむる一つの素因となり得る事は認められねばならぬであらう。

(3) Durkheim's contributions to sociological theory, p. 70.

(4) Ross; Foundations of sociology, p. 92.

(5) ・今マンメルに就いては、こゝに述べ得ないが、結局マンメルに於いては相互作用と云ふ機能的な社會概念が基本範疇となつて居り、更にその相互作用の結晶化客観化としての社會構成體が成立する過程に就いての説明にまで論及してゐるのであるが、デュルケームにあつては、かくして構成されたる客観的なるものに興味がおかれ、更にその個人に作用する方面即ち集團意識の強制に重點が存在するのである。而して我々は、かく外的な社會的構成體を基點としての究明と個人意識との相互作用の方面よりの説明とは共に相補充するものとして重要視せんとするものであるが、この意味に於いて、社會を物として外部より取扱はんとすると共に社會的結果が如何なる個人間の相互關係より由來するかと云ふ社會過程の心理的理解をも合せとらんとするブーグレは、兩者の態度を綜合するものと云

へやう。社會學が客観的たらんとする努力は認めればならない。然しながら客観的なる名の下にその研究の領域より重要な一部の事實を放擲するは危険である。この事實を考へずとも我々は異なる外的形體の間に共存關係を樹立し得る。然しながら合理的な關係を立てる事は不可能である。] (*L'année sociologique, tome III, p. 152*) その重要な領域とは心的相互關係に外ならぬ。

(6) 例へばマンメルやマンナー。

(7) 高田博士(社會學原理五〇三頁)マンナー(Zur Theorie der Kollektivgeschlichen Erscheinungen. Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik, Bd. 141.)

(8) 米田博士(包括社會學概念—經濟論叢第二十八卷第一號、三五頁)

(四)

かくして我々は、簡單に次の結論に入る。

集團意識の成立は、心的相互關係にその端を求めなければならぬ。デュルケームの所謂仕方そのものも究明すれば、この心的相互關係に歸着すると考へられる。而して心的相互關係は、個人と個人との間に、一定の感情、觀念、欲望等が、暗示、強制、價值判斷等の社會心

理的作用によりて、受容せられ或は拒否せらるゝ事によりて始まる。かくて多數の個人の中に、この過程が繰り返さるゝ事によりて、これ等の感情、觀念、欲望等は、各個人意識間に於いて客觀的に共通し、更にこの客觀的に共通する事が各個人に意識さるゝ事によりて、それは主觀の共通となる。かく各個人が一定の感情、觀念、欲望等を單に自己のものとせず他のものに共同的なるものと意識するその意識が、集團意識そのものに外ならぬ。従つて各個人の意識内容を分析すれば、デュルケームの云ふ如く、その個人に特有なるものと他に共同的なるものとの二つが発見せらるゝのである。而して前者と後者と相對する場合、後者は前者を強制する傾向を有する。かくして個人意識に於いて集團意識を自己以上のものとする意識が始まる。然るに集團意識が一度成立した上は初めより感情、觀念、欲望等が共同的なりとの意識を伴ふて個人意識内に入るのである。而してこの場合これ等の共通的な感情觀念等は、個人意識によりて優勝性を認められ無反省無批判に認容せるゝか或は強制的

デュルケームの集團意識に就いて

に受容せしめらるゝのである。而してこれが爲集團意識が個人意識以上なりとの意識は一層強められる。

要するに集團意識は、個人意識の相互關係より生起するものであつて本來個人意識を離れて存在するものではない。個人意識に内在するのである。而も個人意識に對して獨立なる實在性を有するのは、個人意識以上の力を有し且それを強制する力を持つ爲である。換言すれば集團意識は、個人意識を強制し支配する力を有するが故に、我々は個人意識に對する集團意識の獨立なる實在性の所有を認むるのである。従つてかゝる意味に於いて云ふ實在は、形而上學にて云ふ實在とは全然その意味を異にし機能的實在の謂なる事は云ふまでもない。尙デュルケームの集團意識に就いては論すべき事が少なくない。この小論はたゞ他日の機會に於いて述べんとするデュルケームの宗教社會學說の前景たるに止まる。